

# 砂丘

発行：独立行政法人 国立病院機構

鳥取医療センター

発行責任者：下田 光太郎

## 理念

1. 人類愛に基づく、質の高い医療を提供する。
2. 患者本位の医療体制を確立し、十分な説明と同意の下に、自由意志を尊重し、人としての尊厳を守る。
3. あらゆる情報の公開に努め、医療人としての自己研鑽に努める。

## 平成20年鳥取医療センター臨床研究週間開催される。

平成20年12月15日から12月22日まで看護研究、臨床研究及び外部講師の講演等を盛沢山の内容で臨床研究週間を開催しました。発表総数は30題に達し、開催期間の聴講者数は延370名でした。

クリスマスコンサートとして当院医師と理学療法士によるピアノと電子オルガンのコンサートで幕を開け、18日にはソプラノコンサートも行いました。

外部講師の講演として、滋賀医科大学教授の遠山育夫先生の「動物実験用の高磁場MR装置を用いたアルツハイマー病の画像診断法」、全国精神科病院協議会栄養部会副会長で河田病院栄養管理科長の平林真弓先生の「精神科のメタボ対策」、近畿福祉大学教授であり元外務相医務官の勝田吉彰先生の「新型インフルエンザ・パンデミックと心理反応－基礎知識と備えも含め－」の三題を聴講させて頂きました。

優秀研究の審査には、実用性、創造性・独創性、魅力度、アピール度、チームワーク度のそれぞれにおいて5段階評価を行い採点を行いました。最優秀賞2件、優秀賞2件、準優秀賞4件を選出しました。

優秀賞は

「ゼリー食導入に向けての取り組み－トロミ剤の認識に関するアンケート調査報告－」

○横田嘉子、岡田浩子、藤内益美、山下沙也佳、森田愛、森智美

「メタボ脱却企画～NST精神グループ活動報告～」

○蔵本和雄、武田由美子、菅原真知子、岩城芳治、大畑いく子、藤原真由美、川村雅子、山崎みどり、岡田浩子の2題です。

発表演題は最終頁に掲載します。

応募して戴いた職員の方々、協力して戴いた方々及び聴講において戴いた方々にお礼を申し上げます。

臨床研究部長 小西 吉裕

## ● 平成20年度 治験研修Ⅰに参加して ●

9病棟看護師 高橋 晃

この度、治験研修Ⅰとして6月に国立病院機構本部にて行われた研修と、10月に呉医療センターにて行われた実習に参加させて頂きました。本研修は治験業務の経験が3年未満、もしくは今後治験業務に携わる予定の職員を対象として行われています。

機構本部で行われた研修では、「治験とは」、「CRC業務とは」といった治験における基礎的な内容の講義を主体としながら、参加者同士でのディスカッションやグループワークで構成されていました。CRCとしての業務にあたるようになってから日が浅く、経験に乏しい自分にも、非常に分かりやすい講義であったように思います。また、参加者同士のディスカッションは「自施設におけるCRCとしての自己の課題」というテーマで行いましたが、自分同様にまだ治験業務の経験の浅い他施設の方と共に治験について考え話し合うことは、双方に良い刺激を与え合うことができていたように思います。

実習は呉医療センターにて、行われている治験業務の実際を見させて頂きました。年間30件を超えるプロトコルを抱え、院内全体の治験に対する協力体制、インセンティブの高さには非常に驚かされ、また勉強になりました。

呉医療センターにおいては、各病棟に日常的に治験に対する説明に訪ったり、新人研修に治験の説明を組み込んだり、年間数回にわたる院内全体の治験研修会を開いたり、非常に細やかで且つ積極的な啓蒙・啓発活動が行われていました。常日頃より、治験に対する啓蒙・啓発活動をより盛んに行うことが、院内全体で治験に取り組む体制を強化すると考え、その

必要性を感じている自分にとって、この点が非常に印象的でした。

研修全体を通して、治験はチームで行うべきものということ強く感じました。医療そのものがチームで行うべきものですので、これは治験に限ったことではないのですが、治験が一部の職員のみで行われやすい傾向にある中では、それを強く意識する必要性があると感じます。「治験担当」とか「治験責任医師」、「CRC」と名のついた者だけが連携をとることがチームを組むということではなく、そのスタッフらを中心に施設内全てのスタッフがそれぞれの職種の持ち味を活かしながら、治験に積極的に関わることで治験が活性化すると共に、倫理性・科学性を確保した質の高い治験が行われるのだと学びました。施設内全てのスタッフが治験について知り、チームを組むためにはやはり、現時点で知識を持ったCRCが啓蒙・啓発活動をしていくことが必要だと思えます。

今回の研修で得た知識をもとに、更に研鑽を積みCRCとしてのスキルアップを図っていき、院内の治験に対するインセンティブを高めるための一助となれたらと考えています。



## ● 実習指導者講習会伝達講習を終えて ●

8病棟 小林 里美



平成20年度、鳥取県主催の実習指導者講習会に坂本昌子副師長が、NHO中四国ブロック主催の実習指導者講習会に森原賀都子副師長と私が参加させていただきました。講習会では、実習指導に必要な知識として教育学や看護学教育、教育評価等の講義を受け、講義の内容を踏まえた上で実習指導案の作成を行いました。

平成20年12月11日、伝達講習会にて「実習指導の実際」「現代学生気質と指導方法」「教育カリキュラム」について伝達を行いました。実習指導者講習会に参加して得た知識だけでなく、実習指導に対する私たち3人の考えや思いを語らせていただきました。多忙な中、沢山の方に参加していただき、語る私たち3人の弁にも熱が入りました。

青年期にある看護学生は、『人からの意見や指導を素直に受け入れることができる』反面、『相手に気を遣い好かれるかどうかには自尊の感情がかかり、相手に融合しやすく自己主張できない』といった気質を持っています。臨地実習においては、このような学生の気質に加え学生個々の学んできたレディネス（学習が効果的に行われるために不可欠な個体の内的な準

備状態：看護大辞典）を把握し、学生の自己効力を高められるように教授することが求められています。実習指導を行うにあたって、学生個人を大切に（関心を持つ）、共に学び（役割モデルとなる）、公正に評価する（学生の評価＝指導の評価）ことができるように、私たち指導者が努力する必要があります。

私たちの指導や評価が学生に与える影響は大きく、その責任は重いですが、伝達講習会に参加した人たちと実習指導者講習会での学びを共有し、学生をみんなで大切に育てていきたいと思っています。

また平成21年は教育カリキュラムが改正され、「看護の統合と実践」といった新たな教育内容が加わります。教育現場が変化すれば、実習現場である私たちも変わっていかねばなりません。指導者個々の指導力の強化のために、実習指導者講習に参加した私たちも努力していきたいと考えています。



# ● 第62回国立病院総合医学会に参加して ●



## 8病棟 多内留里子

国立病院総合医学会に参加し、『重症心身障害児(者)の摂食体位の工夫』というテーマで発表しました。今回、初めて学会に参加しましたが、大規模で専門性にあふれた研究の数々を拝



見することが出来、大変勉強になりました。実は、帰りの飛行機では隣の席に平井知事さん。発表でも緊張し、帰りにも緊張の一日でした。

## 6病棟 谷口亜紀

11月21・22日に東京国際フォーラムにて、昨年病棟で取り組んだ看護研究「コストをかけず排泄援助を行う病棟の取り組み一患者に合ったオムツの当て方・枚数の検討」について発表をしました。

今回発表した重症心身障害児(者)のグループの中でオムツに関するテーマもいくつかあり、オムツの便尿漏れに対する思いはどこも同じであると感じました。今後も快適な排泄環境を目指し当て方の工夫などの課題に取り組んでいきたいと思います。

## 13病棟 浅雄崇孝

第62回国立病院総合医学会に参加して来ました。全国からの研究発表やシンポジウムを通



して、他病院での問題や対策を身近に感じたり、新たな視点に気付かされたりと、書き切れない多くの気付きを得ました。今後の病棟での看護と自己研鑽につながる良い機会となりました。

## 11病棟 小谷直江

今回、初めて国立病院学会で研究発表を行いました。2分という時間制限があり、口頭で考察を中心に述べ、他はポスターで示しました。うまく伝わるか不安でした。ポスターはさまざまな表現がされ、今後参考にしたいと思います。隣の発表者の方は昨年11病棟に見学に来られた方で、準備中から雑談し緊張が和らぎました。



3名の付き添いがあり心強い旅と発表でした。

## ● 消防訓練について ●

13病棟 児島 祐美子

10月24日に院内消防訓練を行いました。今回は13病棟の喫煙コーナーからの夜勤帯での出火という状況を想定して訓練を行いました。夜勤想定ということで、スタッフ2人ですが、患者様の安全第一に、確実に患者誘導を行えるように勤めました。

夜間帯のスタッフに応援を求めること、患者さまの個人情報を守る必要物品を用意することなど、迅速な判断が必要になると思いました。

もし、本当に火事が起こったら、私自身も慌ててしまうと思いますが、今回のように場面想定した訓練を院内全体で行っておくことで、イメージができ、少し自信が持てました。日頃からの訓練は大切だと思いました。

また、はしご車を用いた屋上からの救助訓練もあり、初めてはしご車に乗りました。なかなかできない経験もできて、よかったです。

11病棟看護師 西尾 佑介

この度の防火避難訓練で初めてはしご車を体験しました。思っていたよりは揺れは少ないと感じましたが、足場はそれほど広くなく高さもあるため恐怖心もありました。11病棟は3階にあるため火災の時にははしご車を使用すると考えられるため、今回の経験を活かし、患者さんの不安が少しでも和らぐよう落ち着いて声かけをしたいと思えます。



## ○ とんど祭り ○

12病棟 白石 千穂

2009年、明けましておめでとうございます。

1月15日、生活療法委員会の季節行事、『とんど祭り』を行いました。

今年も例年通り、松と竹で組み立てたやぐらは、患者様・スタッフから集めた作品やしめ縄で飾られて大変立派なものとなりました。また、今年は天候に恵まれ、暖かい日差しの中でほとんど風もなく、多くの参加者でにぎわいました。

やぐらを燃やす火は力強く大きく舞い上がり、集まった多くの参加者を暖めていました。とんど

祭りの火で身体を温めると無病息災で1年過ごせると言われており、参加者それぞれが今年1年の健康をお祈りされていた事と思えます。病院で闘病生活を送っておられる患者様にとって、とんど祭りでの健康祈願は、一時の心の癒しになったのではないかと感じました。

毎年恒例の年始行事を行い、また新たな気持ちで1年を迎えることができました。



# ● 重症心身障害児(者)病棟クリスマス会 ●

## ～ 5 病棟のツリーその後～

療育指導室長 村 重 薫

今年もイオングループ・ジャスコ鳥取店をはじめ近郊のジャスコ店舗より当院重症心身障害児(者)病棟ならびに重症心身障害児(者)通園みんなの広場へクリスマスの慰問がありました。誠にありがとうございました。この場をかりてお礼申し上げます。(写真のサンタクロースはジャスコ様です。)



さて、クリスマス会の当日はいつもリーダーシップを取っていた5病棟担当保育士が出張で不在だったので、私が会の進行をさせていただきました。面会に来られた保護者さんや病棟職員等まわりがかなり気を遣ってくれて協力の手をさしのべてくれました。たいへんありがたく、おかげさまで無事実施することができました。

クリスマス会といえばプレゼントであったり聖歌隊だったりするのですが、今回は目先を変えて利用者さん、保護者さん、職員みんなが参加しての「クリスマスツリー製作」をしました。



当日、私はしどろもどろであり、大汗かきかき会を進めるだけで精一杯でした。そのときは気づかなかったのですが、あとから写真を拝見して、喜んでおられる顔をあちらにもこちらにもたくさん発見できました！みんな楽しんでもらえたんだ。よかった、よかった。進行役としては、時間がおしてはなんとかしなければと思いながらツ

リー製作に突入したと記憶していましたが、多くの人たちはにこにこ笑っていたり、無心になって手元に集中していたようです。



きっとその時の楽しい思いがいっしょに乗り移ったのでしょう。できあがったこのツリー、ぱっと見にはモサツとしていますがよくみるとなかなか味があります。「これは何だろう？」とツリーの前を通った人の目をひくのです。気になる存在であり、「芸術的だ。」「他にも使えそう。例えば正月飾りにも・・・」「あ

の辺りをこんなふうにするればもっとよくなる・・・。」とこの木のことで話題が膨らんでいく、そんな気になる木のようです。きっと、たくさんの人の手が加わりその人数分のいろいろな思いがツリーに詰まったのでしょ

うね。気になるツリーはクリスマス会からその後もいい仕事しています。正月バージョンは折り鶴が乱舞していました。今は節分バージョンで赤鬼、青鬼が枝の隙間から睨みをきかせています。こんな風に、しばらくは病棟内に置いてもらえ、みんなの目を楽しませてくれそうです。



## メンタルヘルス (第8回)

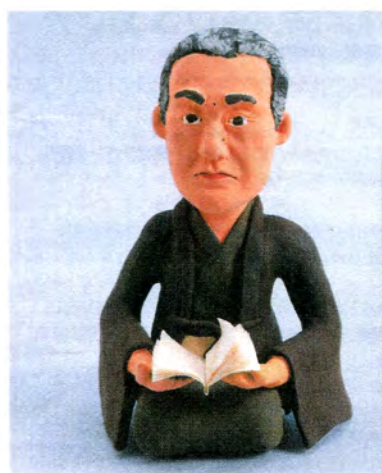
いささかお硬い話で恐縮ですが、マスコミの報じるところによると、今年<sup>1</sup>はダーウィンの「種の起原」の出版から150年になり、生誕からは200年にあたるそうです。ダーウィンによると、人間は太古の昔から不変の存在ではなく、人間もまた原始的で単純な形から次第に変化してきた動物の一つだそうで、最近の遺伝子研究によるとヒトを含む脊椎動物の共通の祖先はナメクジウオだそうですね。

ナメクジウオを直接見たことはありませんが、新聞の解説によると、体長5、6 cmのひよろ長い生物で、ナメクジでも魚でもない。背骨はなく、頭から尾まで棒状の脊索が通っているんだそうですが脳はないそうです。この奇妙な生物からいかにして頭すなわち脳を持った魚を含む脊椎動物が進化してきたのか目下研究中だそうです。

心の起原もそういうところまでさかのぼれるものかどうかよくわかりませんが、そういうことにこころひかれる私は何物でしょうか。

ところで、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と万人の平等を説いたのはご存じ

福沢諭吉ですが、皆様は「世界人権宣



言」をご存じでしょうか。「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、平等である。・・・われわれは、人種、皮膚の色、性、言語、宗教によるいかなる差別も拒

む」。1948年に国連で採択されたいわば人権のバイブルです。しかし、現実<sup>1</sup>は必ずしもそうではありません。どう理解すればいいのでしょうか。私は次のように考えます。福沢諭吉も人権宣言もどちらも英語で表現すれば、「shall」となるのではないかと。shallは最も強い未来形で普通は「べきだ」と訳されていますが、NHKラジオの英会話の先生の解説によると本来は「将来かならずそうなることになっている」という意味なんだそうです。予定調和の考えがあるんですね。

だから今はそうでなくても将来はそうなることになっているんだという強いメッセージが込められているんだと思います。

現実の社会は不平等この上ないように見えます。社会や職場にもいろいろな不安や葛藤があり、それがストレスとなって健康を損なうこともしばしばです。しかし、ここで故キング牧師とオバマ大統領の言葉を思い出しましょう。

『I have a Dream』(私には夢がある)、『YES, WE CAN』(つづく)

精神科医長 松島 嘉彦



# 外来診療科担当医表

独立行政法人国立病院機構鳥取医療センター

平成20年10月1日現在

		月	火	水	木	金	
内科	循環器	松本		松本	松本	松本	
	呼吸器	山本	山本	山本			
精神科	初診	診察室6	坂本	土井	助川	松島	高田
		診察室7	林	池成	池成/岡田	土井/岡田	林
神経科	再診	診察室1	高田	松島	土井	高田	柏木
		診察室2	松島	坂本	川口	助川	土井
		診察室3	池成	林	林	池成	坂本
		診察室7	川口	岩田	岩田	岩田	池成
		診察室8					岡田
神経内科	1	後藤	岡田	井上	金藤	土居	
	2	下田	下田	金藤	土居	井上	
	3		小西		小西	北恵	
小児科	1	中野	小松	赤星	中野	赤星	
外科			湯村		湯村		
専門外来	睡眠外来	精神科5	坂本		高田		
	神経内科 (予約制)	失語症 パーキンソン病		高次脳機能障害	失語症 パーキンソン病	嚥下障害 失語症	失語症 パーキンソン病
		下田	下田	井上	金藤	下田	
小児科 (予約制)	発達外来	発達外来	発達外来	発達外来			
	小枝	赤星	中野	予防接種 15:00~16:00			

- ◆所在地 〒689-0203 鳥取県鳥取市三津876番地
- ◆電話 0857-59-1111
- ◆診療受付時間 午前8時30分～午前11時30分
- ◆専門外来診療時間 午後1時30分～午後3時00分 (睡眠外来の受付時間は午前中です)
- ◆休診日 土曜日・日曜日・祝日・年末年始、ただし、急患の方はこの限りではありません。
- ◆ホームページ <http://www.hosp.go.jp/~nisorit/>

## 臨床研究週間発表演題

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1-1 重症心身障害児(者)病棟の面会日における看護師の関わり方の再考<br/>一面会日に対する家族の思いの調査—<br/>○酒井宏美ら</li> <li>1-2 重症心身障害児(者)病棟におけるより良い情報用紙をめざして—<br/>基礎情報に関する看護師の意識調査を利用した一考察—<br/>○定本菜穂子ら</li> <li>1-3 人工呼吸器装着患者のQOLの実態調査—主観的QOL尺度を用いて—<br/>○田中舞ら</li> <li>1-4 重症心身障害児の座位保持装置の工夫—QOLの向上にむけて—<br/>○吉川妙ら</li> <li>2-1 脳血管障害患者・家族に対する退院支援の検討—住宅に退院した患者・家族の事例を通して—<br/>○岡田沙耶香ら</li> <li>2-2 精神科入院患者の退院支援—退院調整のプロセスと看護師の役割—<br/>○田中美智子ら</li> <li>2-3 面接を通して知る、退院支援中の患者の思い—20年以上の入院生活から退院へ向けて—<br/>○白石千穂ら</li> <li>2-4 精神科薬物療法における患者への情報提供の充実に向けた看護師の役割<br/>○岡田佳那子ら</li> <li>3-1 精神科開放病棟における「危険物」管理—精神科看護師の認識度調査—<br/>○森井孝江ら</li> <li>3-2 結核クリニカルパス使用への検討<br/>○山田さえみら</li> <li>3-3 重症心身障害児・者病棟における骨折事例調査—過去5年の骨折データを通して—<br/>○木下智永子ら</li> <li>3-4 難治性褥瘡治療に向けて—治療に協力を得られない患者の「ずれ」予防に着目して—<br/>○泉本美砂ら</li> <li>A-1 「療養介護、何かが変わる！(療養介護事業で何かが変わった！)」<br/>○木下まり子、大井弥生、園井和恵、橋伸吾</li> <li>A-2 「高齢者脳血管患者における睡眠呼吸障害の検討」<br/>○北恵詩穂里、三宅晃太郎、大田浩右</li> <li>A-3 「簡易間接熱量計を用いた重症心身障害児・者の安静時エネルギー消費量の検討」<br/>○小松倫子、中野英二、赤星進二郎</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>A-4 「当院に於ける頸動脈エコーの実際と依頼状況について」<br/>○山本三千代、青木恵子</li> <li>B-1 「抗菌薬液体培地の有用性」<br/>○大畑いく子、青木恵子</li> <li>B-2 「リンカーナスのラウンド報告(ICTリンカーナスによる手洗い・環境ラウンド報告)」<br/>○木下まり子、森原賀都子、安井恵子、井上一彦</li> <li>B-3 14:42～14:54<br/>「ゼリー食導入に向けての取り組み—トロミ剤の認識に関するアンケート調査報告—」<br/>○横田嘉子、岡田浩子、藤内益美、山下沙也佳、森田愛、森智美</li> <li>B-4 14:54～15:06<br/>「IL-2、IL-8、及びM-CSFの発現がIL-1やTNFαに加えてAlzheimer病初期の病態形成に関与している」<br/>○Akko Wiberding、小西吉裕、佐藤晴久、原野恵子、原野昭雄、有田清三郎、遠山育夫</li> <li>C-1 「中材における洗浄効果の検証」<br/>○清水須美子、岡部智子、木下まり子、井上一彦</li> <li>C-2 「睡眠相遅延症候群の看護」<br/>○戸田範江、山崎みどり、他13病棟看護師・准看護師一同</li> <li>C-3 「当院における予備洗浄剤に関する認識及び使用方法の実情—アンケート調査で明らかになった事—」<br/>○清水須美子、岡部智子、木下まり子、井上一彦</li> <li>C-4 「半側空間無視を呈した症例への就労支援—職場復帰への具体的アプローチ—」<br/>○中島直、神移佑希子、森田愛、曾根弘喜、土居充</li> <li>C-5 「メタボ脱却企画～NST精神グループ活動報告～」<br/>○戴本和雄、武田由美子、菅原真知子、岩城芳治、大畑いく子、藤原真由美、川村雅子、山崎みどり、岡田浩子</li> <li>D-1 「L-2-hydroxyglutaric aciduria の1例に対する遺伝子解析」<br/>○赤星進二郎、小松倫子、中野英二</li> <li>D-2 「ASTに比較してALTの検査値が大きく低下した3症例」<br/>○大畑いく子、西村正道</li> <li>D-3 「小児の読字の習熟過程に関する機能的MRI研究」<br/>○関あゆみ、内山仁史、松浦崇、井川昭二、小枝達也</li> <li>D-4 「MRIでMarchiafava-Bignami病が疑われた多発性脳梗塞の1剖検例」<br/>○小西吉裕、下田光太郎、山本雅司、西村広健、調輝男</li> <li>D-5 「アルツハイマー病脳ではα1-chimaerinの発現が低下している」<br/>○小西吉裕、加藤智子、下濱俊、辻輝之、赤津裕康、遠山育夫</li> </ul> |
|---|---|